

個性を大事にしようとするまなざしをもって（みんなちがって みんないい）

—上津役小学校の取り組み—

北九州市立 上津役小学校

教諭 井上 亜紀

I. 基本姿勢

1. 頭ごなしに叱らない

問題行動には、必ずその子なりのわけがある。また、大人から見たら当たり前の常識でも、分からないのが子どもである。「何をしているのか！」といきなり叱るのではなく、まずは「どうしたの？」と言いつきを聞く。案外教師の見方が一方的な時もあるので、子どもの言いつきによく耳を傾けたい。そうすると、子どもは「自分の気持ちを分かってくれる」と担任を信頼するようになる。(スライド1)

次に、状況を整理して紙に書いて示し、「どこが悪かったのか」「どう行動すればよいのか」を論理的に伝える。そうして、トラブルをソーシャルスキル獲得のチャンスにする。特に、叱る内容は「おだやかに」伝えた方が効果的である。

子「おればかり、叱られる。おれがいつも悪者。」
↓ まずは、言いつきを聞いていると、
「気持ちを分かってくれる」と教師を信頼する。
↓ 「まだ見つけていない」と表現できなかったんだね。
そういう時は「もう少し見せて」と言おう。
↓ 共感と気持ちの内言化・対応法を教え続けると
暴言・暴力ではなく、「〇〇君が、嫌なことをする」と
援助要請したり、「こういうわけがある」と、理由を
説明したりできるようになる。また、情緒が安定する。

スライド1 頭ごなしに叱らない

2. 安心感のある学級づくりをする

子どもは、情緒が安定していると、少しのストレスには耐えられる。しかし、不安定だと、過剰に反応して、不適応を起こしやすい。そこで、学級を安定させ、落ち着いた環境をつくると、子どもは安心して生活できる。だから、学級が新しくなった4月は、「学級づくりの月」と考え、以下の内容を心がける。

(1) 環境の変化をできるだけ小さくする。

①前年度の方法を取り入れる。

「担任が変わると、やり方が変わるから、一から慣れんといけんのよね。」と子どもがつぶやいた。小さなことだが、担任によって朝の連絡帳の出し方ひとつから違う。

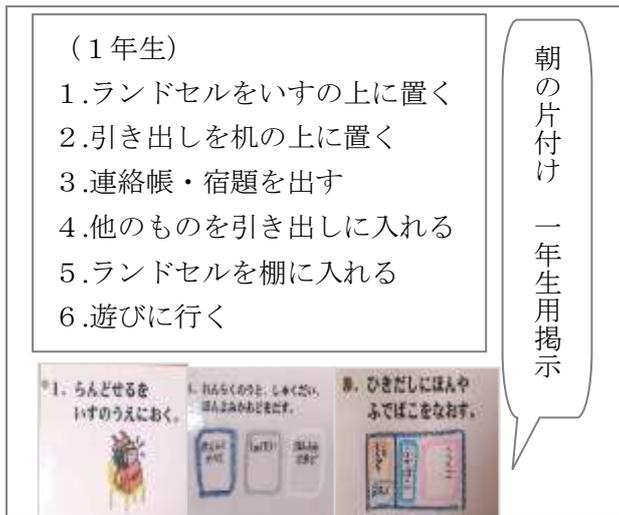
「前はどうしていた？」と聞き、できるだけ前年度の方法を取り入れることで変化を小さくする。そうして、子どもが慣れてきた頃から徐々に変えていくと子どもの負担が小さくなる。

②学校全体で、方法を統一する。

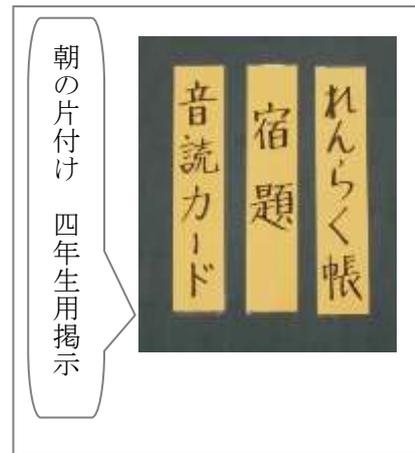
掃除の仕方、給食の準備の仕方などを学校で統一しておく、変化は小さくなるし、学級が変わってもスムーズに動ける。

(2) 手順を視覚化し、定着するまでは1つずつ実行する

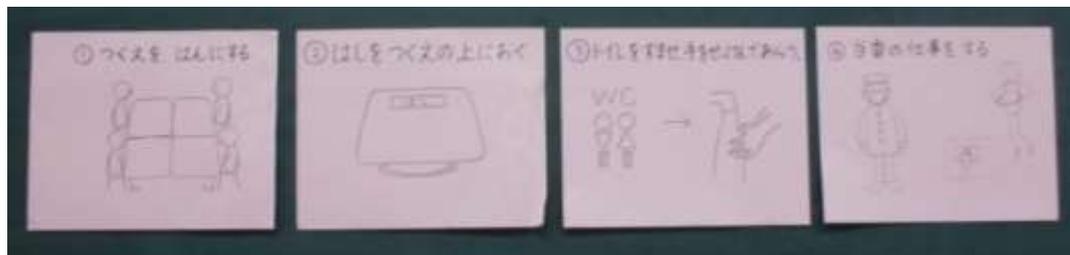
手順カード(スライド2～5)を用意し、パターン化した生活ができるようにする。ルールが生活と授業の中に定着するまで、全員が1つ目の活動ができていることを確認してから2つ目の手順に進むようにする。「この順番でしなさい」と提示するだけでは、全体に定着しない。できるようになると手順を掲示するだけでよくなり、すっかり定着した後は、掲示は不要になる。



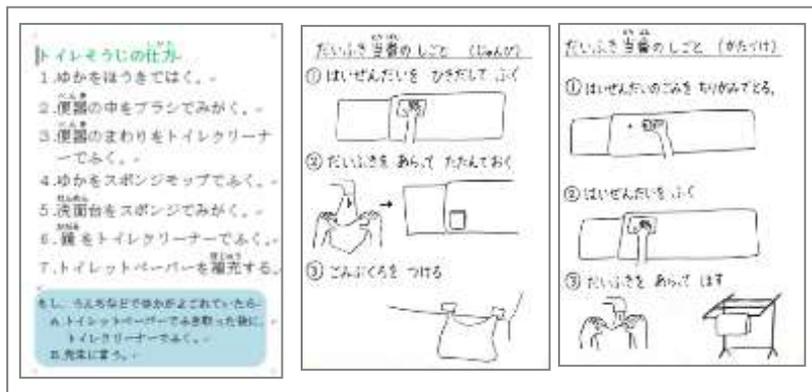
スライド2 手順カード (朝の片付け 1年生)



スライド3 手順カード (朝の片づけ 4年生)



スライド4 手順カード (給食の準備)



スライド5 手順カード (そうじ・給食)

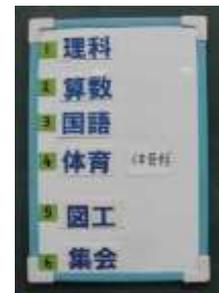


写真1 時間割

(3) スケジュールを示す。

1日の時間割をシンプルに掲示して、見通しが持てるようにする。
(写真1)

活動の進度に個人差が出る内容については、活動内容を掲示する。
耳で聞いて覚えられなくても、黒板を見たらわかるようにしておく
と、学級全体の動きがスムーズになる。(写真2)

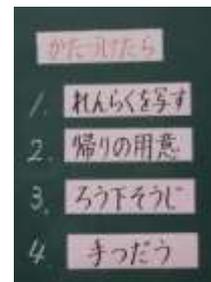


写真2 活動提示

(4) 学習規律を整えるために、ルールも視覚化する。(スライド6)

学習規律が整っている学級は、落ち着いている。逆に、勝手にしゃべる子が多いクラスや、授業が中断することが多いクラスは、集中度が落ちて、落ち着いて学習する雰囲気が形成されにくい。

挙手せずに発言をした時に、図を使って望ましい態度を教える。その際、なぜそうしなければならないかを伝えると、子どもは納得する。一度しっかり説明しておく、次からは、掲示用カードを見せるだけで子どもは気づいて静かにするようになる。



スライド6 学習規律カード

(5) 望ましいモデルを教師が示し、よいモデルをほめて育てる。

①教員は子どもの鏡

「友達にやさしい学級」にしたければ、教員が子ども達にやさしくする。(スライド7) 特に、支援の必要な子への接し方は、教員がモデルになることを自覚する。ていねいに支援していれば、子ども達は手助けするようになる。逆に「こんなこともできんの」と叱り続ければ、子ども達はその子への評価を下げる。(スライド8)



スライド7
声かけ支援

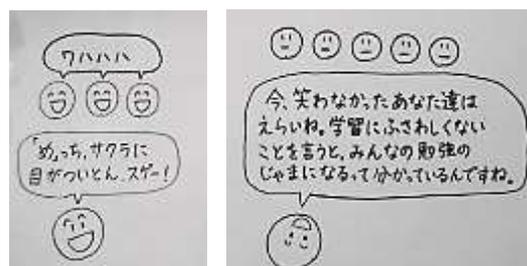
スライド8
子どもを非難する

②よいモデルを育てる

落ち着かない子を落ち着かせようと四苦八苦するよりも、よいモデルを育ててクラスを落ち着かせる方が効果的である。子どもがルールを守らないことを叱るよりも、ルールを守っている時、守っている子どもをほめると、学級が着実に安定感を増し、より学びやすい環境が整う。

授業中にふざけた発言があれば、その発言に対し笑わなかった子たちをほめる。(スライド9)「学習に関係ないことを大声で言うと、みんなの勉強の邪魔になります。邪

魔をしてはいけないと気づいて笑わなかったあなたたちは、賢いですね。」と言えば、ふざけた発言に笑わない子が増える。誰も笑わなければ、ふざけた発言が少なくなる。



スライド9 よい行動をほめる

(6) 居場所のある学級にする

子どもにとって「友達」はかけがえのない存在である。Iさんは、春休み中、「クラス替えて仲良しの友達と離れたらどうしよう」と不安な気持ちで過ごした。Tさんは、クラス替えをして仲よしの友達と離れ、新しいクラスに友達ができず、遅刻が増えた。休み時間に安心して一緒に過ごせる友達がいるかないかは、子どもの心理状態に大きな影響を与える。そこで、

- ① クラス替えの時に、できるだけ交友関係を配慮する。
- ② 実際に学級がスタートしてからは、一人になっている子どもがいないかよく観察する。
- ③ うまく遊べていない子どもがいる時には、集団遊び（爆弾ゲーム、王様じゃんけん、新聞紙じゃんけん等）を仕組み、新しい友達と遊んで楽しかった経験をさせ、休み時間に笑い声が上がるようにする。

3. 苦手さやこだわりに合った接し方を見つける。

困った行動をする子は、まず観察し、その行動の背景を探る。(スライド10, 11)

(事例1)
朝学習の課題「体験学習のお礼状」を書く。
本人は欠席だったので、算数の書き直しを指示する。
↓
取りかからないので、「前において」と誘う。
「ぼく、体験学習をしていない。」と
ぶつぶつ言い、課題に取り組まない。
⇒「体験できなかった」という嫌な思いが昇華できていない時は、次の嫌な行動につづれないのだ。
こういう場面では、課題を本人の好きな内容に変えると、「何もしない」状態は防げるかもしれない。

スライド10 背景を探る(事例1)

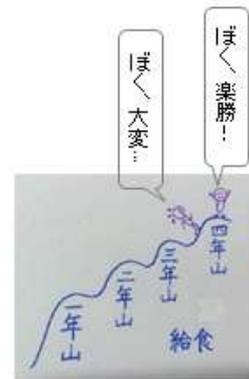
(事例2)
・登校をしる日がある。
・傾向を見ると、特定の日である。
・その日に何か苦手なことがあるのではないかと予測する。
・保護者と相談し、苦手なことを別の課題に変えるとスムーズに登校できるようになった。
⇒「〇〇が苦手」という特性を理解し、その子のできることをさせる。

スライド11 背景を探る(事例2)

スムーズに行動できない時は、その子なりの理由がある。でも、それが上手に言えないのである。つぶやきを聞き逃さず、しぐさを見逃さず、行動を関連付けて、どこでつまづいているのかを考える。そしてうまくいった対応方法は記録し、次年度に引き継いでいく。また、学級の友達にも当人の気持ちを伝え、理解者・支援者を増やしていくことが重要である。

(3) 苦手なことへの配慮と支援

それぞれ得意不得意がある。不得意なことには少しおまけをして、時間内にできることを優先目標とする。給食の完食を登山に例えると(スライド14)、残さずに時間内に食べ終えることが登頂となる。最終目標は、全員4年山登頂を目指したい。しかし、登頂が簡単な子どもと偏食が多くて登頂が困難な子どもがいる。不得意なことは、少しでも登りやすいように少しおまけをする。「おまけがいいな」という子には、「大人になるためには、この先5年山・6年山・中学生山と山は続くこと。その際、確実に登って行っていた方が大人になった時に楽なこと」を伝えると納得して、おまけなしでがんばって登ろうとする。もちろん教員は、おまけなしでがんばった子をほめて、認める。



スライド14
給食4年山

また、どれだけ苦手なのか、級友が理解できるようにして、「えこひいき」とは違うことを伝える。苦手なことのある子の困難さを理解しやすくするために、始めは支援しない。自分たちがさっと終わるノートテイクにおいて、「もう、嫌なんよね。字を書くの。」「こんないっぱい書けん。無理。」等つぶやきながら時間をかけて書いている様子を級友に見せる。そして「書くことが苦手だから大変だね。でもがんばって書いて、えらいね。」と本人の努力をねぎらいつつ、抵抗なく書ける自分とは違う不得意があることに気付かせる。給食時も、クラス替えした最初の2週間は、みんなと同じ量を食べさせる。時間内に食べ終え、さっと昼休みにできる子と13時半までかかって食べて昼休みが短くなる様子を級友に伝える。そうすると、「始めに減らす」という「おまけ」を納得して受け入れる。

こうして、「困っていることや苦手なことが違えば応援の方法も違う」という考え方が浸透し、合理的配慮を許容し合える学級文化をつくる。

今から あと10分

①教室で書き直しをする

②保健室で書き直しをする

③読書する

話を聞いてもらう

選択肢を用いて、落ち着く方法を決める。

読書タイム

掃除する

今、掃除時間

一人だけ掃除

しない

どちらが得かを考えさせる。

読書タイム

けいさつ

しろうぼう

とった

落し物=人の物

がまん

ほしい

食事中に席を立つ →×

Aさんが →×まねする席を立つ →◎「だめよ」

※悪いことはまねしない。よいことをまねする。

深く考えずにとった行動を客観的に理解できるように、棋に書く。

そうじがんばり表

1 ゆかをふく ◎チャイムで始める

2 たなをふく ◎自分から始める

○声かけで始める

4/16 4/17 4/18 4/19 4/20

○ ○ ◎ ◎ ○

何をすればよいのかを分かるようにし、評価をする。



先生に断れば、だれでも使える集中基地



口で言っても治らなかった癖が、写真を見せることで自分の姿に気付いた。

2. 分かりやすい授業づくり

(1) 授業の組み立て

「お客さんになっている子」「静かに困っている子」を少しでも減らし、全員に分かる喜び・できた成就感をもたせたい。そのために、シンプル・クリア・ビジュアルの授業作りを目指す。

- ① 学習の流れをパターン化する。(写真4)
- ② 準備を整えてから、学習を始める。(写真5)

学習が始まる前にノートを開いていて、鉛筆が机の上に出ていると、「さあ、書きましょう」と言われた時に、スムーズに取りかかれる。



写真4
見通しの持てる板書(学習前)

- ③ 問題提示後、解決の見通しを持たせてから、個人思考に入る。(写真6)

- ④ 活動や話し合いに入る前には、
「何について話し合うのか」「何をするのか」
「どのような方法で話し合うのか」
「いつまで話し合うのか」を伝える。

(写真7~9)

タイマーを活用する。(写真10) → 集中力アップ

- ⑤ 活動は15分間のユニット式に組む。
- ⑥ デジタル教材を活用する。(コンパスの使い方・プレゼン)
(写真11)
- ⑦ 個人差の出やすい活動には、学習内容・方法を提示する。
(写真12)

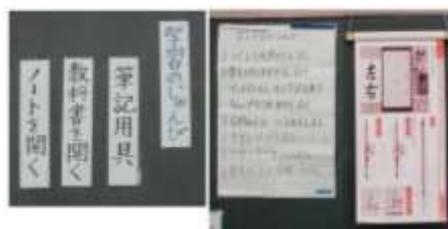


写真5 学習の準備の提示(学習前)

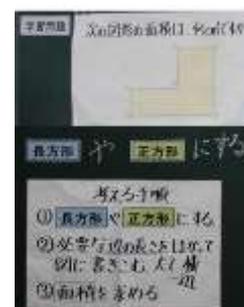


写真6 課題解決の見通しの板書

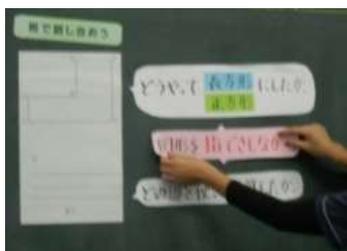


写真7 話し合いの視点



写真9 毛筆練習

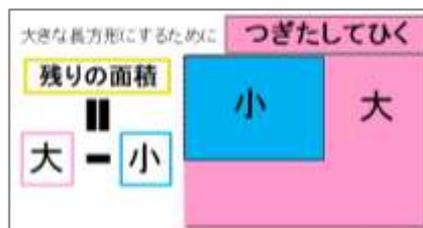


写真11 プレゼン

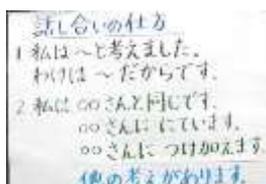


写真8 話し合いの仕方



写真10 タイマー

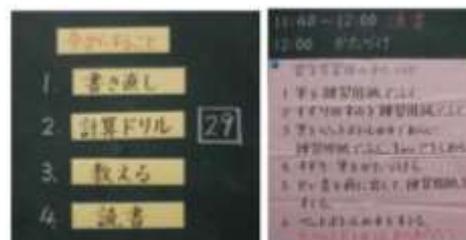


写真12 活動スケジュール

(2) 個人差への支援

発達障がいの子には「ないと困る支援」であり、どの子どもにも「あると便利で役に立つ支援」を増やすことで、全ての子どもたちに学びやすさが向上する。

① 既習事項の提示 (写真1 3)

② ヒントカード (スライド1 5)

位取り表、四捨五入、わりざんアルゴリズム等



写真1 3 既習事項の掲示



スライド1 5 ヒントカード (わり算アルゴリズム)

③ 書くこと

a.授業中のノートテイク

「書く」「できれば書く」を区別する。(写真1 4)

手元カードを用意し、書く時間を短縮する。(写真1 5)

コピーを貼る。



写真1 5 手元カード

b.宿題の漢字練習でお助けプリントを使う。

「お助けプリント」(写真1 7)を使う子は、

文字の形が取れにくい子や書くことに時間がかかる子である。以前は、枠からものはみ出て書いていたが、1年間「お助けプリント」で書くことを続けていたら、枠に入り、字形も整ってきた。漢字を覚えさせることよりも、まずは、嫌がらずに取り組むことを最優先する。次に、苦手だけれど工夫すればがんばれる経験をさせる。そうして、苦手なことにもチャレンジする姿勢を身に付けさせたい。その継続が、漢字を覚えることにもつながっていく。

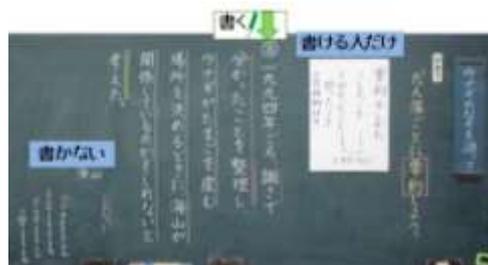


写真1 4 「書く」「書かない」の提示

c.新出漢字の指導

筆順は、動画を見る。(写真1 8)

字形は、へんやつくり等を色で分けて、漢字の部品として覚える。(写真1 9)



写真1 8 筆順動画



写真1 9 漢字の色分け指導

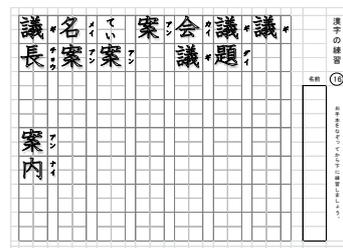


写真1 6 通常の漢字練習

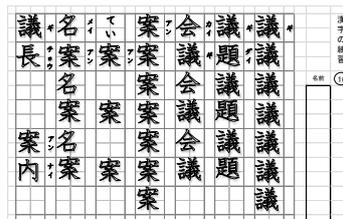


写真1 7 漢字お助けプリント

d. 計算練習…お助けプリント

- ・マス目のある用紙を使うように促す。(写真20) (テストの際は、方眼用紙を渡す)
- ・問題を書いたプリントにする。(写真21)

筆算で解く問題は、①筆算をかく②計算する、の2つの学習が必要である。①を支援して、②だけにすると、書くことが苦手な子どもは嫌がらずに取り組み、計算する力は向上する。

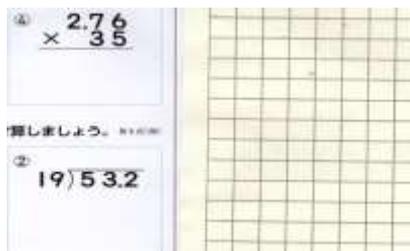


写真20 方眼紙を使う

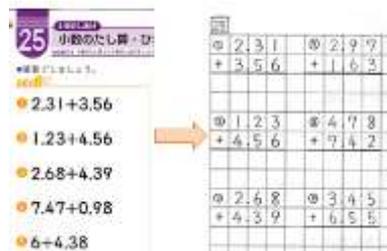


写真21 計算お助けプリント

e. 漢字テスト

テスト中、分からない問題が多くて時間が余る。書き直しの時間には、書き直す量が多くて人の数倍の時間がかかる。そこで、終わった段階で即時採点し、答えを見て書かせることで、書き直しの時間短縮になり、また書き直しを嫌がらずに取り組み、そして、課題を残さずにみんなと同じペースでできる。

f. 作文

行事の作文であれば、記録写真・パンフレットなどを用意する。その後、時系列を板書してから、一番心に残った場面を選んで書くように伝える。

それでも書くことが困難な場合は、担任が聞き取ったことをメモ書きして、整理する。その時の気持ちを選択肢を用いて本人に選ばせながら、担任が下書きする。下書きが終わった段階で読んでやり、気持ちや行動に間違いがないかを確認してから清書させる。一般の子は、自分で下書きし、それを担任が個別に聞き取りながら添削して清書する。支援の必要な子は、添削の段階が省けるため、みんなと同じ時間で終わる。また、それを続けているうちに、強く印象に残ったことは自力で書くことができるようになった。

④ 読むこと

音読練習には、ルビ付き教科書を使う。(写真22)

⑤ 独特な学習の仕方を認める (算数科)

- 通常、 $6 + 7 = 13$ は7と3で10をつくるが、これを $7 \times 2 - 1$ で求める。
- 繰り下がりのある筆算では、10のまとまりから減らすことを教えるが、彼らは補数を考えて引かれる数に戻そうとするため、繰り下がりの数字が書けない。
- 多くの文章題では、1あたり量を求めてから解答を導く方法を教える。ところが、彼らは見えている数字から延長して答えを見つけるため、答えは合っているのに式が書けない。答えが導けるのになぜ式が書けないのか、その背景を探り、テー



写真22 ルビ付き教科書

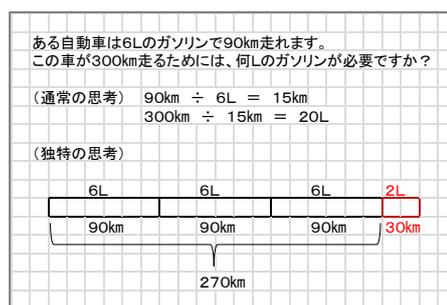
ブ図などで思考過程を表現する方法を教える必要がある。(スライド16)

⑥ 自分の進捗・がんばりを見える形にする。

こうして、苦手なことを工夫して学習する経験を積んでいくと、自分から援助要請できるようになってきた。Bさんは、漢字を覚えることが苦手なので、巻末の答えを見て書いていく。ところが、「巻末の文字が小さいこと」「ページをめくらないといけないこと」が学習しづららしく、巻末の答えを担当に見せて、「これ、無理」と言う。「拡大コピーしたらいいかな?」と聞くとうなずくので、200%に拡大した答えを渡すと、トイレ休憩の時間も惜しんで漢字を書いていた。がんばりチェック表(写真23)を見ながら、シールが増えていくことを励みにしている様子が見られた。そうして、1学期は、漢字ドリルが仕上がらずに苦勞していた子が、学級で1, 2を争う速さで漢字学習を進めるようになった。

また、できないときは、先生が気づくまでじっとしていた子達が、「プリントが破れた。ぼくには無理(うまくセロテープで貼れない。」「漢字プリント(の白抜き)が見にくい。こっち(黒字)の方がいい。」と自分から援助要請できるようになった。

また、これまで配慮をしていなかった子どもが、「この単元は長いので、私にもルビ付きプリントをください。家での音読練習の時だけ使います。」と援助要請したり、苦手な課題に取り組むときに色分けして考えたり、計算するときに方眼用紙を使ったりするようになった。つまり、「困っている子」への支援を見ていた「静かに困っていた子」達が、どのようにすれば自分も学習しやすくなるかを身に付けたと言える。



スライド16 独特の思考



写真23 頑張りチェック表・シール

Ⅲ. 学校全体の取り組み

1 連携した取り組み

(1) 年間計画 (スライド17)

(2) ケース会議 (学年ごとの情報交換会)

- ・学期末に開く
- ・1学年につき40分~70分
- ・参加者(スライド18)
- ・目的は、共通理解・経過報告・手立ての模索・子どもの見方を探ること
- ・課題を抱えた子を、一人一人経過報告し、参加者で検討する。

(3) ケース会議から支援機関へ

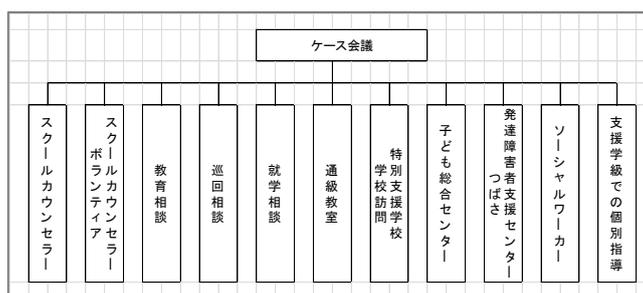
子どもの実態と家庭状況を参加者で検討して、どの支援機関につなぐと効果的かも話し合う。(スライド19)

年間計画		
1学期	5月初旬	特別支援の必要な子どもについての引き継ぎ
	5月中旬	児童理解の職員研修(実態把握と共通理解)
	1学期末	ケース会議(学年ごとの情報交換会)
2学期		児童理解研修
	2学期末	ケース会議(学年ごとの情報交換会)
3学期		中学校との情報交換
		保育園・幼稚園との情報交換
		児童理解の職員研修(1年間の様子と共通理解)

スライド17 年間計画

ケース会議 参加者
校長
教頭
教務主任
特別支援コーディネーター
サブコーディネーター
養護教諭
当該学年のクラス担任

スライド18 ケース会議参加者



スライド19 つなぐ支援機関先

(4) 通級教室へのつなぎ

担任が保護者に通級教室を勧めた際、多くの保護者は不安を感じるものだ。その場合、担任・保護者・サブコーディネーター・校長で懇談会をもち、通級教室内容等を説明することで、子どもを伸ばすよい制度だと理解してもらう。

懇談の中では、学校での様子・家庭での様子から

- ① その子の得意・不得意を整理する。
- ② 学校・家庭でのがんばりと、努力しているのに成果が表れていないことを整理する。
- ③ 通級教室での訓練の様子の具体例を紹介する。

a.板書を写すことが苦手な子には、眼の動きの訓練をする。(写真24)

b.指示をよく聞けない子の中には、指示を頭の中において、行動に移すことが苦手な子がいる。その場合、「青の右手」という指示を聞いて、「青の右手」カードをさわる訓練をする。

c.状況の読み取りが苦手な子には、4コマ漫画で「どうしている場面か」を推理させていく。(写真25)

d.気持ちの表し方の苦手な子には、「表情カード」でどんな気持ちになるか考えさせる。



写真24



写真25

通級教室	申し込みの手順
上津役小学校	9/4までに、書類を送付
↓	↓
通級審査相談会の日程決定	8月27日
	9月25日
	10月13日
	11月6日
	11月26日
	↓
	通級決定通知
	↓
	来年度4月より通級指導開始
要:送迎	

スライド20 上津役小からの通級

④ 通級教室制度について説明する。(スライド20)

2. 職員への情報提供

(1) 「職員室だより」(写真26)

校長が、特別支援教育の視点を、週1回発行の職員室だより「まなざし」で紹介している。

① 子どもを肯定的に見ることが大切。

できないことを探すのではなく、できることを探し、ほめる。ほめられることで、子どもは自己肯定感を高め、自信を持ち、情緒が安定する。

② 成功体験を積ませる。

自分で「できた」「わかった」の達成感を積み重ねていくと、やる気と自信につながる。

③ むやみに叱りつけることは絶対に避ける。

子どもが望ましくない行動をした時には、その子どもが理解しやすい方法で注意を促す。子どもを学級で厳しく指導した時には、その子のよい点をほめ、快感情をもたせて帰すように配慮する。

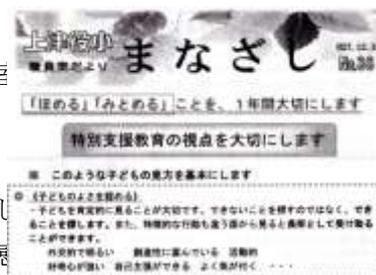


写真26 職員室だより

3. 学校行事

(1) 始業式

1学期の始業式は特別に不安が高い日である。クラス替えで友達が変わる、担任が変わる、教室が変わる、と環境の変化だらけになる。

また、3つの式があり、見通しをもちにくい。そこで、

① 前日に、各教室に当日の予定を掲示しておく。(写真27)

② 始業式後の教室移動前に、次の予定を知らせ、見通しをもたせる。(写真28)

③ クラスカラーを使う。(図1)

4クラスの子どもが、4分の1ずつ分かれて新しい教室に移動するので、新しい友達・新しい先生・新しい教室で迷わずにすむように、クラスカラーの旗を使う。先生の顔を覚えることが苦手な子も、「赤色の旗」を目印についていくことができる。色は、1年生の時の1組は黄色、2組は桃色、3組は青色、4組は緑色のクラスカラーを使う。

靴箱や傘立てもクラスカラーを使うことで、分かりやすくなる。

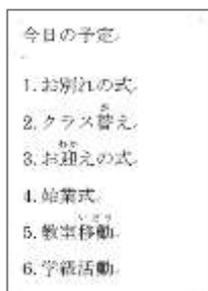


写真27

始業式の日の予定

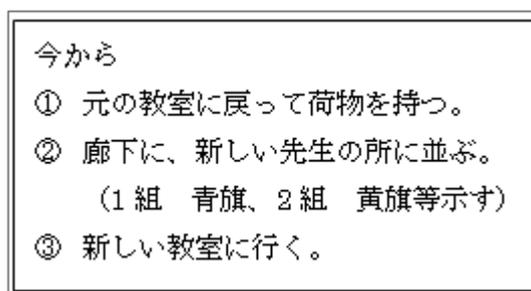


写真28 教室移動の手順

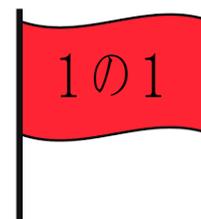


図1 学級旗

(2) 入学式

- ①前日に入学式会場、教室を見学する。
- ② 教室に予定を掲示しておく。(写真29)
- ③ 入学式の前に、教室で前年度入学式の写真を見せ、入学式の内容を知らせる。(写真30～33)
- ④ 童席の後ろに補助の教師が待機しておく。保育園・幼稚園から事前に好きなキャラクターを聞いておき、その絵等を用意しておく。

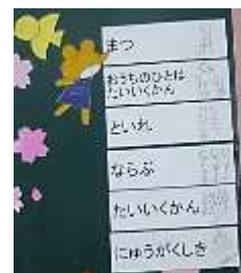


写真29 入学式までの予定



写真30
体育館に行って座る



写真31
校長の話聞く



写真32
6年生の話や歌を聞く



写真33
記念撮影をする

(3) 修学旅行

事前に、前年度の写真をプレゼンとして用意し、子どもたちに見せて、不安を軽減する。(写真34～36)



写真34
修学旅行事前説明会



写真35
食事の様子



写真36
活動の様子

(4) 5年自然教室

今年度の夜の活動は、子どものアンケート結果より「肝試し」に決定した。ところが、「肝試し」がこわくて自然教室に行きたくないという子や宿泊に不安を感じる子が12名いたので、以下のような配慮を考えた。

- ① 「肝試し」参加についての選択肢をつくる
 - a. 怖い話も聞くし、肝試しにも参加する。
 - b. 怖い話は聞かないが、肝試しには参加する。
→怖い話の時間は、別室で過ごす。
 - c. 怖い話は聞くが、肝試しには参加しない。
→肝試しの時間は、青年の家で教師と一緒にみんなを待つ。
 - d. 怖い話を聞かないし、肝試しにも参加しない。
→怖い話の時間から肝試しが終わるまで、別室で教師と過ごす。

その際、肝試しをこわいと思う友達や肝試しに参加しない友達を「弱虫」等と言ったり、冷やかしたりしてはいけないことを伝える。

その結果、「b.怖い話は聞かないが、肝試しには参加する」が13名。彼らは、別室で教師が用意した「落語なぞなぞ」を楽しんだ。楽しい活動をして過ごしたせいか、その後の肝試しには全員が参加した。

② 宿泊に不安を感じる子には、宿泊施設の見学を保護者に勧めた。

a.実際に自然の家に行って施設見学する。

b.インターネットで施設の様子を見せる。

c.施設のパンフレットをもらってきて見せる

の3つの方法を保護者に伝えた。ある家庭は、施設見学を申し込み、実際に宿泊する部屋を見学した。

③ 仲よしの子と同じ班にする、仲よしの子の隣で寝るようにする。

始めは不安を訴えていた子どもが12名いたが、これらの手立てにより体調考慮の1名以外は全員が宿泊できた。

IV. 終わりに

どの子ども「できるようになりたい」「認められたい」と思っている。しかし、教員の画一的な方法では「分からない」子ども達がいる。子どもをよく観察し、何が原因でうまくいかないのかを探り、指導の方法を工夫することが私達教員に大事なことだと思う。新しい子どもと出会ったばかりの頃は、試行錯誤で取り組む日々。子どもとうまくいかず、反発されることもしばしばある。けれども、「あなたの味方だよ」「あなたが楽に向上する方法を考えているのだ」と、メッセージを発信し続ける。そうして、子どもが担任を信頼するようになった時、子どもは担任に援助要請をするようになる。そこから初めて見えていなかったその子の本当の困り感が見えてきて、より適切な支援法を工夫できる。そして、本人の自己理解を促すこともできる。「ぼくはこれが苦手だから、こうお助けしてもらおう。でも、これはみんなと同じようにできるから大丈夫。」というように。また、その支援法は確実に記録して引き継いでいくことで、新年度に大きな環境の変化とならず、本人にストレスがかからないので、安定を保つことができる。こうして大事に育てられた子は、他者を大事にするようになる。

学級づくりにおいては、「安定した学級集団」づくりに努めて、子ども達の情緒の安定を図る。また、「認め合い、助け合う学級集団」づくりに努め、友達を理解し、違いを受け入れ、助け合う生き方を身に付けるようにしたい。できないことは手助けを受け、できそうなことは工夫して取り組む。そうして、学校で、「人間っていいな」「人は助けあう生き物だ」という人を信頼する気持ちを育てたい。そうすれば、大人になって社会に出た時に、違いを受け入れ、人と助け合いながら暮らしていくと思う。そして、社会にうまく適応して、自分らしさを失わずに活躍できるのではないかと思う。

保護者との関係においては、保護者と教員に連携して育てられた子は、確実に伸びた。教員だけが支援をがんばった場合は、伸びが小さい。だから、困っている保護者の

頑張りを認めつつ、家庭での工夫の方法を知らせ、励ます。そうして保護者とのつながりを大事にすることが、子どもを伸ばすことにつながる。

最後に、担任が一人で抱え込まないようにしたい。一人一人のニーズに合わせて指導法を工夫することは、手間がかかる。ましてや、その子のニーズがつかめない段階では、悩み、苦しむ。だから、私達は情報交換して知恵を出し合い、協力し合いたい。そうして、子ども一人ひとりが自分に自信を持って輝けるように、教員みんなで力を尽くしたい。

出典：「ソーシャルスキルトレーニング実践教材集」 上野一彦 ナツメ社